

最後の偉業

L'ultimo capolavoro

(翻訳に当たって、イタリアで用いられている発音を使ったものもあります。地名は極力現地名を入れて、日本で通用する発音に直しています。* = 訳者注)

2007年、9月7日、漸く私達はデイリー (Delhi) 行きの飛行機に乗り込む事が出来、デイリーからは1時間の待ち合わせでカトマンドゥ (Kathmandu) へ乗り継ぐはずだった。

私は機内の座席に寄りかかりながら、家から遠く離れたこの異国の街を目の前にして、またしてもサティアナンダに自分は負かされたのだと感じていた。彼はこの旅、チベットのカイラス山 (Kailasa) を巡るパリクラマ (Parikrama) へ到達する巡礼の旅に、有無を言わずに私を引き込む事に成功したのだ。

思えば、この旅の話が出たのは2年前だった。私を含む参加者全員が殆ど必要な装備を買い求めていた。私は、しかし、この旅に積極的に参加した訳ではなく、あまり乗り気ではなかったのを覚えている。

そうして準備が出来た夏、修業中にサティアナンダが病気になってしまい、全ての予定がキャンセルされたのだ。

私は気が進まなかった為に、むしろ、その事にほっとしたのを覚えている。

むしろ、旅行の予定が完全にキャンセルされれば、とっていたし、少なくとも自分だけは参加したくないと思っていたのだ。

2006年、アシュラム (精神修行の場) でのサン フランチェスコ (アッシジの聖人) の記念日に式典が始まる前にサティアナンダ師は私に近づき、

「私はお前がこの巡礼の旅があまり重要ではないと考えている事は判っているし、お前が聖地カイラス山がお前の心の中にあれば良いと思っている事も知っている。それでもやはり私達と一緒に行かなきゃいけないよ、さもないと皆、納得しないだろうからね。」と、囁いた。

それを聞いた時、その本当の意味が私には理解できなかった。そうしてやがてこの旅がチベットへ到達した時、彼の言葉の意味が、光に当てられたようにはっきりと、始めてその姿を現したのだ。

2年後のこの巡礼に参加するに当たって、色々な問題があった。ただ自分は参加すべきなのだ、師のそばに付き添っているべきなのだ、その思いだけが自分の中で繰り返し感じられた。

問題は、不思議と次々に自分の周りで解決されていった。例えば、前に師に就いて修行をしていた友人が、私の為に費用を提供してくれたりして、私は何か狐につままれたように思ったものだが、後で、実は師がその友人に、「シモー

ネが巡礼に参加しないなら、私も行く訳には行かない。」と、話した為だと判った。

私は今でもこの言葉に涙が浮かぶ。サティアナンダを想い、私の心に熱いものがこみ上げてくるのだ。

「だから、シモーネの費用は、どうか君が工面してくれないか」。

私の為に師が自分自身の尊厳を捨てて、人に頭を下げてくれた事を考えると、私は師に対してただ、ただ彼に就いて身を捨てる事しかできないように感じて、頭が下がる思いがした。

こうして他の問題も解決されて、高山で生活する為の必需品、薬などの全ての用意は整った。

その時点で、サティアナンダの訓練が私達に施された。毎朝、アシュラムでの修行に就く前に 10 キロのリュックを背負って何キロかの道を歩いた。この訓練は私に 68 歳の年齢で、どのぐらいの距離が適当であるか等が判ったし、毎日の歩行は私に自信を付けてくれた。

しかし、ある日の練習中、私は自分の心臓にかなり負担がかかるのを感じていた。途中で練習を中止し、血圧を測った所、かなり高いものだった。しかし、私としてはここで引くわけには行かないと思い、その事は誰にも告げないでいた。その事で病院に行ったり、検査を受けたりする事も何故か躊躇われて、私は自分のグル（師）だけを信じて先へ進む事に決めたのだ。

けれど、私は心の中で師にはいつも、こう訴えていた。「あなたには私の健康状態が判っていますよね？ 私自身、いつ死んでもその用意は出来ているつもりです。けれど、その後に残された家族、彼らを思うと死ねない気がするんです。もしもの時にはあなたが家族の面倒を見てくれますよね、お願いします、約束ですよ」と。

しかし、サティアナンダはこの旅での信じられない体験によって、自分の精神探求の道が到達点に達する為の大きな力を私に与えてくれて、その約束を果たしてくれたのだ。

デイリーに向かう機内で、私の心の中にはこうした様々な思いが蘇っていた。そこへフランカが近づき、一冊の本を私に差し出した。

レイモン パニッカーとミレーナ カッラーラ (Raimon Panikker, Milena Carrara) の「カイラス巡礼」だった。

「サティアナンダ先生があなたに渡しなさいって。」と、フランカは私に言った。

そこへ師自身が私に近づき、「シモーネ、この本を読んで欲しいんだ。イタリアへ帰った後、我々のカイラス巡礼について書いて欲しいからね。」と、私に言った。

私は正直、自分で感じる事を書く事は好きではなかった。しかし、私が何より信頼する師の頼みを断るわけには行かなかったし、それが後で私自身を見出す事になるとは、この時点では想像も付かなかった。

デイリーからカトマンドゥへの旅は短距離で、むしろ楽しい旅だった。出発は朝の10時、ロイヤルネパール航空機。

師が同行するこの旅では、彼は案内役であり、灯台の光であってあらゆる困難が問題なく解決されていった。

この旅の計画の後ろに師の力が大きく動いているのを疑うものは誰もいなかった。

飛行機は11時50分にカトマンドゥに到着した。我々は用意されたミニバスに乗り込んで、ホテル マナングという市の中心にある快適なホテルへ到着した。

カトマンドゥは標高1700メートルでチベットへの入り口となっている。ここからカイラス (Kailasa) まで標高3000メートルが続き、ドルマ (Dolma) まで一番高い地点で、5760メートルに達する道のりだった。

あらゆることが危険であり、特に高山病では吐き気、頭痛、平衡感覚の喪失などを引き起こす。

しかし、カトマンドゥでは誰もそうした問題を起こすことなく、滞在の3日間はむしろ気楽な楽しい時を過ごす事ができた。師と共に過ごす時間は嬉しかったし、私達はドゥルバン広場 (Durban Square)、昔の中心地、カスマンダップ (Kasthamandap)、生き神様の家、クマリ (Kumari) 等を訪れた。

クマリで、この旅に支障をきたす、警察を巻き込んでの事件が起こってしまった。クマリで、クマリ神が蘇ったとされる少女が古い建物に滞在している。生き神様だ。そこで、時折、運がよければその少女が小さな木の彫刻を施した窓から顔をのぞかせて、そのお顔を見る事ができる。それが人々に対する祝福だと考えられている。

その日、その中庭は数多くの巡礼者や観光客でごった返していた。我々のグループだけでも20人がそこに居た。クマリ神が現れる兆しは何もなかった。そこで、サティアナンダ師は写真を撮り始めたのだ。

更に、建物には上階へ通じる階段があり、その上にクマリ神とされる少女と親戚、友達など、彼女の世話をする人々が住んでいた。階段はもちろん何人足りと入る事を禁じた札が立っていて、その中には誰も入る事は許されていない。師はそれを無視し、上階へ上がって、クマリ神が遊んでいる様子を見た上に、多分、写真まで撮ってしまったらしい。

大騒ぎが始まった。クマリ側はすぐに警備に連絡をし、師を中庭へ連れ戻した。警察が呼ばれ、神聖進入冒瀆罪で逮捕し、カメラを押収するよう要求した。師は写真を撮っていないと主張し、(たぶん自動的に押されてシャッターが下りてしまったのかもしれない) クマリ神の警備たちは神聖冒瀆に対する厳しい刑罰を要求していた。

そこへ観光で来ていたイタリアの地方行政委員のグループが警備隊側に付き、師に対する逮捕は正当だと主張していた。

しかし、警察は何をどう処理して良いのか判らなかつた。私達は師を取り囲んで、何があろうと彼を守ろうと意気込んでいたからだ。

そのような騒ぎがあつたにも拘らず、最終的には師のカメラからフィルムを抜き取って、それで解決となつた。

サティアナンダひとりが騒ぎから外れ、落ち着いていたのは、むしろそうした騒ぎを起こす事で我々が直面しなければならない問題を提起しているように見えた。この巡礼の旅では、一人ひとりがどんな場合に対しても、冷静かつ正しい判断をする様にと試していたのだろう。

午前中、バイラブ (Bhairab) ,破壊の神の神殿からタレジュ寺院(Taleju)を見てからハタマンドゥカ宮殿を回つた。その後私達は世界で一番古いストーパとされるスワヤンブナート(Swayambhunath)に到達した。

午後、師は私達をバグマティ川の淵、パシュパティナート (Pashupatinath) へ連れて行つた。チベットでも重要な聖地だ。

この寺院はシバ神を祭っていて、ヒンズー教徒しか入る事はできない。師が寺院内に入り、シバ神を拝む間、私達是对岸に陣取つて待機していた。

その間、川沿いで死者が茶毘に伏されている光景を、私達は川の東側に座り込んで見続けていた。

サティアナンダ師は、多分全てを計算していたのかもしれない。こうして茶毘に伏する経験の無い我々に (*ヨーロッパでは火葬は殆ど用いられず、殆ど埋葬の形をとっている)、そのやり方を最初から最後まで見るように計らつたのだろう。師は寺院から戻ると私達と共に座つて、やはり死者を火葬する様子に見入っていた。

夕刻の静けさが私達を包み、師と共に居る平和な時間がこうした神聖な場所での神聖な行事と共に私を深い瞑想に導き、私は自分の身体から魂が抜け、完全に自然の中に溶け込むのを感じていた。静けさの中に存在するのは自覚と幸福感だけだつた。

それは師がもう遅くなつたと、声を掛けるまで続いた。皆を連れてホテルへ戻ろうと、ガイドが待っている。

私は目覚めたが、ロボットのような感覚で、魂は身体に戻つたものの、長い間高い自覚の世界に留まって居るのを感じていた。

いよいよ、次の日の午後にチベット、ラサ (Lhasa) に到着した。飛行機から降りるや否や標高 3700 メートルの影響を肌感じた。

ホテルは中国風で、居心地が良く、ホテルのレストランではチベット風の菜食メニューが用意されていた。

師はすぐにレストランの責任者と友達になり、我々に対する対応は非常によいものになった。

しかし、その時点で私の暢気な楽しい観光気分は終わってしまった。サティアナンダは私を呼び寄せ、私が師と部屋を共にする事、世話係のフランカと供に師の面倒をすべて見る事、旅の期間は昼夜を問わずに師に付き添う事などを言い渡したからだ。気軽な観光は終わってしまったが、それは、むしろ私にとって喜びだった。

ポターラ (Potala) で師に用意されていた部屋はとてもきれいなものだった。ポターラを見渡せる部屋には大きなダブルベットがひとつ置かれ、私達はそれを分け合ったが、居心地の悪さは感じられなかった。むしろ、夜間の照明に浮き上がった街の様子は神秘的で、私を深い瞑想へ誘うのだった。しかし、瞑想というよりは自然へ帰るという感覚、自覚の存在、それは我々一人ひとりの本当の自然の姿、本来人間は神なのだという大きな人間の特質が私を至福へ導いたのだった。

だから、彼を世話するという事の代償に、なんとという贈り物を私は師から貰った事だろう！

こうしてカイラス(Kailasa)への旅は続いた。師は、このラサからヴァカンスは終わり、本当の巡礼の旅が始まったのだと話した。確かに、ここから何人かが高山病で苦しむ事になった。吐き気、下痢、不摂生、頭痛、熱の症状が現れた。そうした時、師の存在は皆を助け、そうした症状がすぐに軽くなるのは不思議な光景だった。

こうした高山病に慣れるために、わたし達は3日をそこで過ごした。これから向かう地は、標高5000メートル以上なのだ。その3日間、私達はチベットの旧市街を見て回った。ジョカン寺はチベットの首都の心臓部に当たる。バルコルの商店街も見て回った。更にダライラマの旧住居だったポターラ宮殿の美しさは言葉で表すのは難しい。

この素晴らしいチベットやそこに住むチベット人の宗教や神聖はまさに人生の本質であるように思う。ポターラ宮殿にそって、伝統的なチベット大学薬草学部が置かれていたが、それは取り壊され、スーパー、デパート、マクドナルズに変わってしまい、こうした伝統的なものが近代的なものへ変貌してしまう事に、心は痛んだ。

かつて、チベットは巡礼の都だった。チベット各地から巡礼者が集まって、聖なる力があつたのに、その自由も力も無くなってしまった。巡礼者は文化に興味を持つ観光客とは違うものだ。ここではチベット人の存在そのもだけが深い信仰心に変貌してしまい、形を変えて生き延びている様な気がするのだ。

ラサにおける我々の滞在は、高山に身体が慣れる為には必要なものだった。また、その間、複雑なセラ (Sera) の修道院やラサから 5 キロほど離れたドライラマの夏の住居だったノル布林カ (Norbulingka) 等を訪れて歩いた。

サティアナンダ師は何か喜んで滞在している風で、あちこちにカメラを向けては色々なアングルから、最もきれいだと思われる角度を見つけてはシャッターを切っていた。

私達も負けじと、師の様子をシャッターに収めたりしていたが、その中で、私が非常に気に入っている写真が一枚ある。このノル布林カの庭園へ通じる門の両側に、私と師がそれぞれ対して座り込み、まるでその庭園の護衛しながらに休んでいる様子が写っているものだ。平和に、至福に、祝福に満ちたその庭園の目に見えぬ闘を我々が守っている、というふうだった。

9月13日、旅はギャンツェ (Gyantse)、シガツェ (Shigatse)、サガパリヤン (Paryang) を経て、マナサロワール湖 (Manasarovar) のあるホルチュ (Horchu) には9月17日に到着予定だった。

我々は5人がひとつのグループとなり、運転手及びガイドをかねたチベット人の運転する4輪駆動の大きな車にひとグループづつ、計4台の車に乗り込み、困難な旅が始まった。

一日6~8時間の移動中、昼食でお弁当を食べる時だけ、車は停止した。師は、その難儀にひたすら耐えているようだったが、その疲労感は傍からも感じられ、そのために私の神経は磨り減った。私ばかりではない、マルコやフランカも、何とか師が少しでも楽なようにと気を使っていた。

道はアスファルトの舗装を出ると、穴ぼこだらけのホコリっぽい道が続いた。師が疲れ切っているようにも、その存在は常に我々の拠り所であり道標であり私達を守ってくれる神の様なものだった。

ラサからギャンツェ間は261キロの距離なのに、車で7~8時間かかった。その間、舗装された道は僅か約70キロほどしかなかった。

キチュ (Kyi Chu) の谷を横切って、川にかかる橋を渡った後、カンバラ峠 (Kamba-la) (標高4794メートル) に続くカーブの多い道に入った。しかし、その峠から、いきなり、一望に広がるヤンドウロック (Yamdruk) 湖が目飛び込んできた。湖を囲む山と、水の色コントラストが言葉を飲み込むほど美しかった。この信じられない美しさに、一同、ただうっとり景色に見とれる以外、皆、言葉をかわす事も忘れていた。更に道は下り、再び5010メートルの峠を越えた。

そのような険しい道程の途中、一時、車が止まった時、師、サティアナンダは私に近づき、こんな事を言った。

「この旅で、私達二人のうち、ひとりだけが生きて帰れるんだ。お前が生きて帰れる様、私が責任を持つよ。」

私達は車に戻って、再び移動が始まった。先ほどの師の言葉が私から離れず、私は全神経をそれに集中したが、本当の意味は判らなかつた。

私はそれまで、師より先に死ぬのは自分だという考えを当然のように思っていた。師には90歳過ぎても元気でいて欲しかったし、彼の仕事を全うして欲しいと言う気持ちが強かった。（*この時点で、師は78歳）どうして私達のうち、帰国の途につくのは一人だけなのか、何故、どうやって私の命を救うのか判然としないまま、ただ漠然とした不安に捕らわれていた。

9月17日、パルヤン（Paryang）から聖なる湖、マナサロワールのあるホルチュ（Horchu）へ出発した。カイラス山巡礼の出発点であるパリクラマ（Parikurama）のあるダルチェン（Darchen）に移動する前に、マナサロワール湖で3日間の滞在予定が組まれている。

ある地点で、聖山カイラスと、聖なるマナサロワールが一望できる丘の上、私達はその神秘的な景観に心を打たれて車を降りた。

師は、私達の目の前で五体投地し、その後で完全に大地に身を投じた。私達の誰一人として、師のそんな姿を想像した事は無く、只、物も言わずに眺めるだけだった。

サティアナンダ師は偉大なるリシ（Rishi＝賢者）の言葉通りの生活を実践していた。「私は何もしない。動作は私のものではない。自然が私の周りで動くのだ。全てが私の周りで生じ起って行くが私は何もしない。私は私自身でいるだけだ。私には父も母もない。兄弟もない。私は妻も子供も友達すらない。私は師を持たず、弟子もない。私は私自身である。私は私自身でいるだけである。多くの人が私の事を語り、香を炊く。さらに、私の為に聖歌まで歌うが多くの人には本当の私の事を知らないのだ。私が私である事を。」

私が自分の偉大な師について語るに当たって、最後の1片が残されるだけとなった。この世における素晴らしい存在として、偉大な魂としてサティアナンダ師は実在した。インドの聖人の中でも特に神の再生として崇められたアナンダモイマの弟子だった。

私達が聖地、マナサロワール湖へ着くと、サティアナンダ師は湖から10メートルほど離れた所にテントを張るよう指示し、私達全員は師から離れ、チベット人のシェルター達が料理をする台所用のテントと食堂に使う大きなテントの近くへ、各自のテントが用意された。300メートルほど、師のテントから離れた所だ。

師のテントだけがぽつんと湖の畔に取り残されたように置かれていたが、私のある場所から湖と、小さなテントとシバ神に祭られた聖なるカイラス山が良く

見渡せた。

翌日は平穩に過ぎた。サティアナンダ師とは内面で通じるものが強く、長く続いた。

ある日、「私とシモーネは同じ意識でいる。」と、前にアシュラムで皆の前で言った事がある。

「シモーネは滅多に私を訪ねて来ないにしても、私達はいつも一緒にいる。」それは本当の事だ。私は常に私自身といるからだ。魂にいるから、サティアナンダとは常に一緒にあり、それがアトマン（アトマナンダという私の名前はアトマ、魂から来ている）だからだ。

この頃になると、師の付き添いは車で移動する時だけとなり、昼夜を問わずにお世話をするという事は無くなった。おそらく、私が呼吸を楽にしようとしていたエッセンシャルオイルの香りが、必要以上に強かったと見え、それが師の感覚を刺激したらしい。

この事があってから、マノサロワールに着いたら、一緒に沐浴をしようとして話していたのが、以後、それについては何も言わなくなってしまった。

夕日が陰る頃、師は皆で瞑想をするのだと、私達全員を師のテントの周りに集めた。その時、師は白装束に身を包み、聖なる湖の畔で、何枚かの写真を撮るように指示した後、明日の朝、10時を過ぎるまで、何人たりともテントに近づかぬよう言明した。

私達は瞑想もせずに追っ払われた感じで、正直な所、全員が少しがっかりした。しかしながらまるで禅僧のようなサティアナンダ師の態度には慣れていたので、むしろそんな事が私を深い瞑想に誘い、心は完璧な静けさと平和の中にあった。

ネパール人のシェルパーたちの用意した夕食後、私達それぞれが高山用の寝袋に包まり、寒さに耐えた。高山病はほとんどの人を襲い、酸素欠乏から頭痛で夜寝るのは難しかった。

眠れぬ夜に苦しみながら、暗闇の中で、師の言葉を思い起こしていた。

「明け方、聖なるマナサロワール湖に入って、水浴をしよう、私とお前とで。」

師は良くこんな風に、誰もいない時に一種特得な雰囲気私に言ったものだ。

「明日の朝、明け方に私達二人だけで森を散歩しよう、でも誰にも言うてはいかんぞ、お前と私と二人だけでな。」

けれど、今回は違っていた。師からの確認はなかったし、明日の朝十時まで、誰も師のテントに近づけないのだ。

何か出口が塞がれた感じだった。一方では聖なる湖で、師と一緒に聖なる沐浴をしたいという気持ちと、一方で師の命令には逆らえないという気持ちが同時

に存在していた。私はテントの中で、寝袋に包まり、私の親しい、やさしい友である夜を感じていた。

眠りが訪れるまで、シシリアの詩人に心を向けた。

夜はどこから来るのか、どこに住んでいるのか判らない
多分、時間の境を越えた遠くなのだろう
そこは終わりの無い世界の始まった所かもしれない
あるいは、天上の神が、女神と住まう住居から、
愛のしぐさに揺り動かされて地上に落ちてきた、
全てを優しく包み込むヴェールの様に軽やかに動いてゆく
夜は僅かに触れるだけで、全てを覆い、
全ては平和と愛に満たされてゆく
夜はすべての人への贈り物を用意し、それに何の見返りも望まない
夜は命へ恵みを導いて、そこに滅びはやって来ない…

この様にして、やがて眠りがやって来て、気がついた時には明け方だった。私はテントの外へ出て、まるで神聖な光のような朝日が上るのを眺めていた。

皆が目覚めて朝食をしたためた。その後、湖の畔にある古い修道院を訪れる為に準備が始まった。

私が皆と一緒にそれぞれの車に乗り込んだ時、何故か衝動に駆られたように参加する気持ちを失って、車から降り立った。

皆は出発し、私は一人、テントへ戻った。

テントに入ろうとした時だった。やはり残っていたマルコが真っ青な顔をして、私の所へ飛んできた。

「師が亡くなってしまった。フランカが10時にサティアナンダ師を起こしに行ったら、サヴァサーナの姿勢をとったまま、お顔は静かだけれど、入滅されたんだ。」

「何を馬鹿なこと言っているんだ！」これが私の最初の返事だった。「嘘だ、何かの間違いだ、師が…」

「死ぬなんて、そんな事、しちゃいけないじゃないですか」と、私自身の中で師に問いかけた。

「皆があなたをまだまだ必要としているのだし、もっと、もっとずーっと長く生きてくれなきゃいけないんですよ。」

私は師のテントへ向かって走った。信じられない気持ちと、何かの間違いという気持ちだけを握り締め、落ちてくる涙をぬぐう事もできなかった。

私の目の前に師のテントが近づき、払い退ける様にテントの中に入った時、私は師を見たのだ。師はまるで彫刻のように美しく崇高に横たわっていた。

かつてアシュラムでの瞑想中のように、彼はこの世を去ったのだ。
ニルヴィカルパサマディ (Nirvikalpasamadhi)、自覚の最高点で、川が海に消滅するように、魂が宇宙に溶け込む込む状態だ。
人は普通、彼そのものを消滅し、神と一体になるこの状態を、あまり体験する事はできない。
そして、師は自覚を持って、ここ、聖なる湖とカイラス山の麓で入滅し、サティアナンダの身体はここに残った。
多分、天上では彼の師、アマンダモイナ師が清らかな世界へ彼をやさしく迎え入れた事だろう。

この時点で、私から不思議と悲しみが去って行った。
むしろ、素晴らしい人生の完成、というように感じられたのだ。スシル マツンダと呼ばれた一人の人間が生まれ、サティアナンダという尊称を受け、神に同化し、名前を持たなくなった。

私達、残った3人だけが、師のテントの脇に座り込んだ。まだ、誰も帰って来ていない。
フランカが泣いている。私は師が、私達を見捨てたのではなく、今まで以上に私達一人ひとりのそばにいてくれるのだと、静かに話した。私がそのように信じられた事、師は決して我々を見捨てたりはしないのだと、彼女の肩をさすりながら話し続けた。

まるで、私の話に答えるように、一羽の小鳥が師のテントにやって来て、しばしそこに留まった。それはまるでフランカを慰めるために来たみたいだった。長い間、師に仕えていたフランカへの、最後の挨拶の為に、師が姿を借りてやって来た様に、思えてならなかった。自分自身を放棄し、師の傍に身を置いた多くの人々への、究極の別れのようにも思え、その事でフランカを含め、私達は少し持ち直した。

その時、師が前からよく話していた様に、目に見えぬ師が私達の近くに存在している、と確信を持つ事ができた。老いて病んだ身体という物質があるが故に、自分は思うように人を助けられないと、話していた。彼は人を助ける為に、肉体から離れ、自由になったのだ。

私はテントから離れ、聖なるマナサロワールの湖で、わが師を想ってその水の中に身を投じた。
朝の11時でも、身が切られるように、水は冷たかった。
師は入滅前に、やはり湖で沐浴をしたに違いなく、夜の水温は零度を下回っていただろうから、一体どんなだったろうかと私の心は再び暗澹とした。

13時過ぎに、散策に行った連中が戻ってきた。むろん、ひどい驚愕と悲しみがみんなを襲った。師の最後の偉業を前にして、私達は寡黙だった。

師のこの選択を何とか理解しようと、みんなの努力が要った。ヒンズー教徒にとって尤も神聖なこの場所で自らの意志で入滅する願望は、実現可能が難しい。サティアナンダ師は、それをやり遂げたのだ。

暫らく後、私達は否応なく、現実と直面しなければならなかった。火葬だ。

しかしながら、チベットで亡くなった外国人に対してはこの土地の習慣により、身体はいくつかに切り離して鳥葬に伏するよう決められている。しかし、そんな事は私達の愛する師に受け入れられるものではない。

多分、ここでも師が哀れな弟子達に力を貸してくれたのだろう。私達はカイラス山のふもと、マナサロワール湖の見渡せる小高い丘に場所を定め、火葬を執り行う許可を取る事ができた。

18日は徹夜でサティアナンダ師のお通夜をした。皆それぞれの場所で、師のテントを見張り続けた。皆の思いはきっと、それぞれだったに違いない。けれど、師を想う気持ちは変わらなかつただろうと思う。

私達は19日の朝、師の横たわる、組んだ薪の周りを取り囲んでいた。最初に火をつけるのは一番弟子の私の役目だった。風習に従って、藁のおかれた師の口から火をつける。

我々全員にとっての初めての経験だった。私や、皆の頭には、師に連れて行かれたパシュパティナート寺院での茶毘の様子を思い起こされていたに違いない。あの時は、まさか自分達が実際に師の火葬を行うなどと思ったものは一人もいなかっただろう。けれど、師は、全てを予測しながら私達に見せていたのだ。

火は師を包み込み、私達は胸を打つ、激しい、しかしながら敬虔な思いに打たれていた。

深い闇に光をもたらしてくれた、私達が愛した師に敬意を表した。

多くの人が恥ずかしさも無視し、隠そうともせず大泣きしていた。そんな様子を見ながら、私には本で読んだひとつの話が思い出された。偉大な師が亡くなった。一番弟子は葬式にやって来て泣いた。更に泣いて号泣した。ひとりの方がやって来て、彼を叱るようこう言った。「そんなに泣くのではない、人がお前をどう思うだろう、まるで修行ができていないみたいじゃないか、まるで馬鹿のように悲しんでいると思うだろうよ。」それに答えて弟子は言った。「何回も愛する師を見ていたこの眼が泣くのはどうしようもありません。私がこの信心深い、愛情深い仕草を非難するのですか？私自身、ここにはいません、私は存在していないのですから。」

火葬が終った時、私達は師の遺灰を壺に収め、師の遺志によって、私と後の2人で預かる事になり、インドのガンジー川に流す予定だった。

我々はいよいよダルチェン (Darchen) に向かって出発しようとしていた。そこから仏教界の世界の中心であり、ヒンズー教のシバ神が祭られているカイラスの頂上を周るパリクラマ (Parikrama) の巡礼が始まる。

サティアナンダ師はもう存在しなかったにも拘らず、それから先の困難な道程を前にして、私達皆が師の存在を強く感じていて、彼の祝福によって、私達は安全に守られていると感じさせていた。

カイラスは説明書によると、チベットの人には聖なる山で、ヒンズー教徒には少なくとも一生に一度は見てみたいと夢見る聖地だ。インドやチベットの叙事詩には、カイラス山から生まれる4つの川が謳われている。インダス川 (Indo)、タザンポ川 (Brahmaputra)、カルナーリ川 (Karnali)、サトレイ川 (Satley) はチベットからネパール、インドにわたって流れている。

9月20日、朝食後、ダルチェンを出発した。ダルチェンではこのきつい巡礼に耐えることの出来ない何人かがそこに残った。

さらに、各自の体調に合わせ、私のようにタルボチェ (Tarboche) までは4輪駆動で移動するグループとここから出発するグループとに分かれた。ここから出発するグループはリュックを背負い、3キロの道程を歩き始めたが、どちらのグループも通るのはトラックや車の行き交う埃っぽい道だった。

タルボチェで巡礼に参加する全員が再集合し、パリクラマ巡礼が始まった。聖なる山の雄大さを前に、私は幾らか不安を覚えた。師の紹介で知り合った大学教授と話をした事を思い出したからだ。彼女の巡礼経験ではこのカイラスの巡礼の困難と危険は決して侮ってはならぬ、というものだった。例えば、パリクラマを歩行中、もし事故にあった場合、それは即、重大な危険を意味する。なぜなら救急隊の援助は不可能だからだ。更にこの標高の高さは歩行を困難にし、問題は非常に緊迫したものとなる。

夜はテントで寝るのだが、正確に言えば、氷点下の寒さの中で眠ろうと努力しただけだ。そのような困難な時に、師が身近にいてくれるのはありがたかった。多分、参加者の全員がそう感じていただろう。

途中、多くの巡礼者に出会った。彼らは足や手にも布を巻いて、一步ずつ、五体投地で、全身を大地に投げ出しながら歩くのだ。起き上がっては投地し、また起き上がる。

タルボチェ (4750) から最初の到達地点、ディラプク (Dhira Puk) までの20キロの道程だ。

歩行は早く、楽だった。途中、カイラス山が、その山の全貌を見せ、その美しい姿に、私はこの先何があろうと、その困難に立ち向かえるという勇気が湧くのを感じ、思わず聖なる山に頭を下げた。

更に、サティアナンダ師が常に我々と一緒だと強く感じられるのは、皆にとってもかなり不思議だった。

「私がこの身体から離れた時、私はお前達をもっと助ける事が出来るし、お前達ももっと私を身近に感じるに違いない。」

私の師の言っていた事は正しかった。師は晩年、身体の支障を訴えていた。だからその身体から抜けた魂、純粋な自覚は制限するものがなくなり、今は全て可能になったのだ。

最初の行程は問題もなく楽しい気分で歩き終える事ができた。シェルパーはヤック（*チベット高原に棲む牛科の動物）に重い荷物や道具類を積み、私達が着いた頃はすでにテントを張っていた。食堂は彼らが料理するテントに整えられて、用意されたトイレは穴を掘っただけのものだった。

ネパールの美味しい夕食をとったあと、それぞれがテントに入り、寝ようと試みた。少なくとも身体を休めようとしていた。標高 4700 メートルでは、寝る事は難しい事なのだ。

私は寝袋に入った後、呼吸困難を感じて、目を閉じる事も息をするのも苦しかった。朝目覚めた時、第二行程をこなすのは無理だと感じた。ドルマラ

(Dolma-la) 5470 メートル、までは急な勾配が続き、ズトゥルプク (Zuthul Puk)、標高 4760、までは険しい下り坂になっている。この行程では 9~10 時間を要する予定だ。

私はサティアナンダに祈った。どうしたらいいだろう？すると、馬がいるから、それに乗るよう指示があった。私はシェルパーに訪ねると、歩行困難な人の為に、馬の用意がある事が判り、私は飛びつくように手配し、ドルマラまでは馬で行く事にした。

馬といってもかなり小さな、頑丈な馬だった。行く道は深い谷に面した細い道で、あまりよい解決ではないとすぐに悟った。チベット人のガイドは、最初の行程で馬を使うのはよいが、第二行程では非常に危険であると言う。馬が足を滑らせるか、何かに躓きでもたら、そのまま馬も私も深い谷にまっさかさまだという事実には絶えず直面していなければならなかった。

私は殆ど、この選択に泣く思いをしたが、後は師を信ずるしかなかった。そのおかげか、何事も起こらずに、無事に峠に到着した。

おかしいことに、馬から下りて、しっかりした大地に足を下ろした時、自分の足で歩く事に喜びさえ感じ、私がここへ着く事はきっと神の望みだったのですね、サティアナンダ師が望んだ事だったのですね、という気持ちになっていた。

師は笑いながら言っただろう。「少しは怖い思いをしたって、無事に着いただろう。お前の命は私が責任を持つと言ったじゃないか。」と。

私達は全員、ドルマラ峠に集まり、その素晴らしいカイラス山の景観を堪能した。

峠では信仰者のタルチョが風になびいていた。私達もサダナアシュラムを代表して、それぞれのメッセージや名前を書いた旗をくくりつけ、心をこめた儀式を行った。タルチョを結びつけ、サティアナンダ師の着ていたものをくくりつけると、僅かな休憩の後、私達はズトゥルプクへの急勾配を下り始めた。

大地に足をつけるのに喜びを感じたというものの、急勾配の坂を足で下りるのは大変な作業だった。足の親指の爪の損傷から、突き刺すような痛みが続いた。その時になって、登山のエキスパートの助言を取り入れなかったことを悔やんだが、遅かった。彼は登山靴の靴紐を、否というほどきつく縛らなければ、足の指が保護されないと、何度も念を押していた、その意味が漸く判ったのだ。

仲間の一人が足を挫いた。が、そのまま歩き続けていた。私達は歩調を緩めて歩いたけれど、その為か目的地には、永遠に到達できないのでは、と思うほど恐ろしく長い道のりだった。

いつもの事ながら、シェルパーたちはヤックと共に先に着き、私達がへきへきとして着く頃は、全ての用意を済ませていた。その夜、少し寝る事ができ、翌日の行程を歩く用意は出来ていた。タルボチェ (Tarboche) まで下り坂が続き、カイラス山の巡礼が終る地点まで 14 キロ、徒歩で 4 時間の予定だった。

サティアナンダ師のおかげで、皆無事にタルボチェ、つまりダルチェンへ着く事ができた。タルボチェで、何人かは 4 輪駆動に乗り込み、あるものはこのパリクラマの巡礼を最後まで全うする為に、ダルチェンのゲストハウスまで歩いて行った。

カイラス山の巡礼は終わった。

サティアナンダ師の援助は、はっきりとしたものだと、私たち誰もが感じていた。聖なる山の巡礼で、ある地点ではかなり困難なものがあった。師の魂の静けさの中で、師の存在と彼の導きは我々の足元を照らす明るい光だった。

サティアナンダ師は無限の中で亡くなり、彼自身が無限になった。

師は形のあるものから自由になった。吹く風の中に、雨の中、太陽の光の中、あるいは子供のあどけない笑顔の中に、母親の涙の中に、恋人達の喜びの中、一人ぼっちな寂しさの中に溶け込んでいる。

すべてから解き放たれた事、これが本当の彼の最後に残した偉業だと思っている。
そして、自覚と至福が残された。

こうしてカイラス山の巡礼が終わり、それぞれが生涯、忘れる事の出来ない思い出を胸に抱いて山を下りてゆくだろう。そして誰もが、巡礼を始める前の自分自身に二度と再び戻る事はできないと感じているにちがいない。聖なるカイラス山の巡礼を全うした事で祝福を受けた者は、この巡礼中に自分の命はもううなくなると、感じただろう。

そして同時にそれは蘇りの予告でもあった。新しい生命の始まりだ。
師は、私達に与えてくれたこの贈り物がどんなに大きなものだったのか、多分最初から知っていたのだろう。

Om shanti shanti shanti

あとがき

この苦しかった巡礼の旅を思い起こすに当たって、師が私に言われた事も思い返す。

何年も前の事だった。

「私はこの地に降りて来るに当たって、私の仕事に助けが必要だと感じ、お前に一緒に来るよう頼んだのだ。私達は同じ所から来ているんだ。」

「だから、もし、私が死んだなら、お前は私の後を継がなければいけない。」
それを聞いた時、私はあまり注意していなかった。私より師が先に死ぬなど、ありえないと思っていたから、たいして本気で聞いていた訳ではなかった。

「けれど、私がやっていた通りを繰り返してはいけません…何か、新しい方法を見つけなきゃね、ただし、忘れてはいけませんよ、我々はここで奉仕する為にいるので、命令する為にじゃない、よく覚えておきなさい。」

更に付け加えた。

「私はこれから自分を小さくしていかなければならないんだ。お前はこれから大きくならなきゃいけない。」と。

師の亡き後、師の創り上げたアシュラムは運営委員会が管理するようになった。

私は、アシュラムから離れ、師の言われた言葉に従う決心をし、今、歩き始めた所だ。

びっくりするほど多くの人達がついて来てくれた事を、私は師に感謝している。
そして、始めたばかりの私の奉仕の道が、師の遺志とそれほど遠く離れていない事を祈るばかりだ。

Atmananda